

学術の風景

Vol.17

IOCと Nature, Cell, Science

永田和宏

この号が出るころ、オリンピックはどうなっているのだろう。私がこの原稿を書いているのは、東京都に4回目の緊急事態宣言発出が決まった時点であり、多くの会場が無観客での開催という決定がなされつつあるところである。

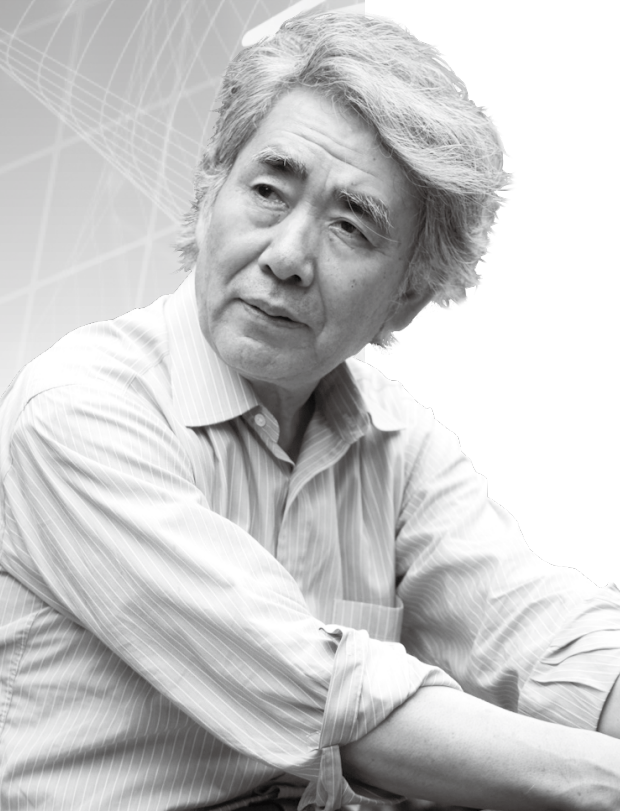
オリンピック開催について、さまざまな議論を聞いてきたし、聞かされてきた。直前の東京都議会選挙においても、オリンピック開催は大きな争点の一つでもあった。そんな中で、誰かが指摘してくれないかと、私が個人的に思っていたことがある。それは、たった一人の人命とオリンピック開催は天秤にかけられるものだろうかという単純な問いである。

こんな点から議論を始める政党も政治評論家も居なかった（と思う）が、専門家会議も指摘していたように、いくら政府の言う「安心安全の」を繰り返してみても、オリンピック開催による感染者の増加は、避けられないところであろう。それによって、死者が一人増えるという状態を考えてみた場合、その一人に目をつぶって開催に踏み切るか、一人の人命はオリンピック開催を断念するだけの重さを持つと考えるか。

私は後者の立場をとるものであるが、開催によって何パーセント程度の感染者の増加が見込まれるかといった誰もが慣らされてしまった感染者数だけを漠然と見積もるのではなく、それによってたとえ一人でも死者が増えた場合、その死者の重みにオリンピックという平和の祭典が耐えうるものであるかどうか、そんな議論がついになされなかったことを残念に思う。

今回IOCの絶大な力をいやというほど見せつけられたと感じたのは私ひとりではないだろう。

「決めるのはIOCだ」と言いきった首相の言葉が端的に示しているように、一国の感染の危機、死者数増加の危機に際してさえも、国のトップは自らの決定権



プロフィール

永田和宏（ながた かずひろ）

JT生命誌研究館館長、京都大学名誉教授、

京都産業大学名誉教授

専門：細胞生物学

を放棄し、それをIOCに委ねなければならないのか。もし一人でも死者が増えたとき、その一人の死者に対する責任をIOCは取れるのか。IOCが、一国を凌ぐような権力を持つにいたったのは何故なのか。

ちょっと待てよ、と思う。どこかで同じような思いを持ったことはなかったか。

まことに唐突な連想で申し訳ないが、私は不意に、Nature, Cell, Scienceという、所謂、生命科学分野の「御三家」とも呼ばれるジャーナルに連想が飛ぶのを如何ともしがたいのである。言わずもがなであるが、インパクトファクター (IF) がそれぞれ50.0、41.6、47.7 (2020年) という驚異的な数字を誇る、生命科学分野のトップジャーナルである。それぞれ複数の姉妹誌を有しており、それらも軒並みIFは高い。それ自体結構なことであり、研究者として研究発表を行う以上、できればそれらに論文を載せたいと思うのは当然であるし、私自身それらに採択が決まったときの喜びは鮮やかな記憶として残っている。

しかし、なんとかこれら三誌、またその姉妹誌に論文を載せたい、載せて欲しいという思い、さらに、これらの雑誌の論文を読んでいないと現代の科学に付いていけないという研究者集団のある種の強迫観念が、その購読料の高騰を許してきた経緯は紛れもない。大学の図書館では、学術雑誌の購読料高騰に音を上げているところは少なくないが、どの雑誌を削るかという議論の中で、購読料の高い雑誌ほど、削る対象にはなりにくいという皮肉は多くの人を経験したことだろう。

本来、学術成果は誰でもアクセスできるところに本来の意義がある。そこでオープンアクセス化が進んでおり、どのジャーナルもその方向へ動いているようである。それ自体は好ましいことであるが、Natureの提示した掲載料を見て驚いたのは私だけではあるまい。一論文につき120万円という。べらぼうな額であり、その高飛車な額の提示に怒りさえ覚えるほどである。しかし、正直に言えば、載せてくれるのならそれくらい出しても元は取れる、というのが、また研究

者の実感であろう。なぜか。

そこには業績評価の基準が大きく関わっている。科研費の審査、新たなポストへの応募と審査などの個人レベルでの評価、あるいは学部や研究所、研究所群などの成果の評価いずれの場合も、個人の、あるいはそのグループに所属する研究者のpublicationがどんな雑誌に発表されたかが、大きな評価の対象になる。

研究機関の目標として、明確にそれを打ち出しているところもある。トップ10と呼ばれるようなジャーナルに年間何報以上とか、Nature indexに収録されているジャーナルに何報以上などという目標設定である。

論文はただ数を出せばいいものではない。質こそが問題である。だからいいジャーナルに出すというのは理に適っている。しかし、すぐわかるように、これは本末転倒でもあろう。評価はIFや雑誌で見積もるものではなく、あくまで論文の内容、発見の意義とインパクトでなされるものであり、その地道で困難な作業をIFに委ねて、それを質と見做すのは短絡であり、評価努力を自ら放棄しているに他ならない。

また一方で、よりIFの高いジャーナルへという過度の集中が、「権威の幻想」を生み出しかねないという点には慎重な対応が必要となろう。誰もが掲載を望み、誰もが読まなければと強迫観念に近いものを持つことで、いよいよそれらトップジャーナルの力が過大になる。本来は研究者が自由にアクセスできてこそその学術誌であるはずが、それが各大学の研究費の大きな部分を占め、締め付けるということにもなりかねない。私がIOCの専横的なふるまいを見つつ、Nature, Cell, Scienceに思いが及んだ所以である。

学術誌はいま大きな曲がり角に来ているように見える。研究者自身が、そして評価制度が生み出しているトップジャーナルへの過度の依存のほかにも、プレプリントジャーナルをどう考えてゆくのか、さらにハゲタカジャーナルとも呼ばれる一群の雑誌にどう対処していくのか、考えるべき問題は多い。